

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.114

2012年12月12日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 タシュクルガン／画・甲斐大策

「緑の大地計画」の天王山

中村 哲

清掃係から調理まで

グラムジャン

心から感謝申し上げます

グラムサキー

患者から医療従事者へ

ファザレワヒード

カシコートが緑で覆われる日を夢見て

村井光義

「義の人」中村哲医師

谷津賢二

●カラー特集 用水路建設工事の変遷 第1回 マルワリード用水路

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

「緑の大地計画」の天王山

私たちが根底から支えるのは温もりと和やかさ

時々流されるアフガン情勢は、戦局や危険情報、復興支援をめぐる報でなければ、それに対する評論ばかりです。いくら安全や人権が主張されても、アフガン人の生命や人権は含まれていないようです。…ここでは、どんな理屈も評論も虚ろです。それよりも、餓えた人々に温かいパンの一切れを分かち合おうとする真心だけが、励みであり、信ずるに足ることです。

PMS 総院長／ペシャワール会現地代表 中村 哲

「緑の大地計画」最大の挑戦

みなさん、お元気でしょうか。

当地も初冬にさしかかり、高山が薄化粧をしてきました。川筋の風が冷たくなり、防寒具が要る季節になりました。

相も変わらず、河の工事に追われています。アフガンでは、渇水期です。河の水位が思いきり下がり、毎年今頃でないと思えば、取水堰や護岸の工事ができないのです。

今年はまだ、特別です。昨年十月から準備してきたカシコート取水堰工事が、のるかそるかの段階に差しかかっているからです。

PMS（平和医療団・日本）とペシャワール会では、カシコート復興を「緑の大地計画」の天王山と位置づけ、大規模な工事が進んでいます。

本工事が過去十年の「緑の大地計画」の最大の挑戦だと考えて差し支えありません。対岸四〇メートル先には、マルワリード用水路の取水口が見えます。対岸では同水路の灌漑によって、二五・五キロメートル全流域が殆ど無駄のない土地によりがえり、一五万人以上の人々が故郷に戻り、自活できるようになっています。しかし、取水口は一昨年の大洪水で相当傷み、改修を余儀なくされていましたが、兩岸の対立

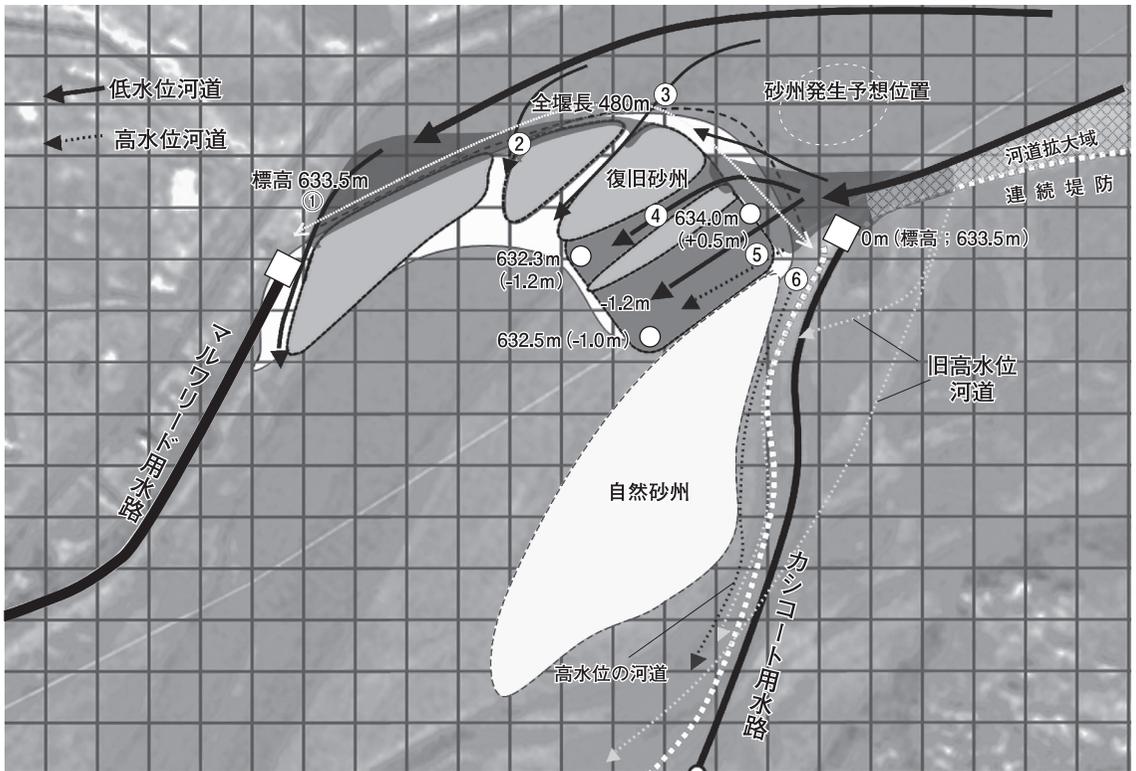
堰の一体化

が根深く、対岸からのアプローチが出来ずにいました。

ところが、昨春秋、カシコート自治会とPMSとの和解・協約が成り、同地域の灌漑計画が動き出しました。計画が成功すれば、陸の孤島であるカシコート全域が難民



クナール河上流からみるカシコートとマルワリード取水口（幅は約 500 m）



主要河道 マルワリード=カシコート堰 (①~⑥は河道)



作業場が川べりに集中、河道⑤、護岸壁、取水門、河道④、中州復旧、河道③閉塞の、各作業

化から免れ、同時にマルワリード堰の安定が保証されることとなります。つまり、マルワリード・カシコートとの堰が一体化され、維持が約束されるからです。

しかし実際の工事は、相手が大自然でも二〇一〇年夏の大洪水で流失した砂州を復旧しながら、大河クナルを横断する作



カシコート取水門の柱＝堰板を積む溝（2012年11月4日）



カシコート取水門背面



マルワリード用水路のガンバリ沙漠末端から送水される、シギ地区へのサイフォン造設中（2012年10月22日）

りです。生易しいものではありませんが、十二月中旬で大勢が決すると見えています。現場はさながら戦場です。重機九台とダンプカー一六台、精鋭の作業員二〇〇名を集中、必死の作業が整然と行われています。

緊迫した努力

長い間PMSの工事に携わってきた彼ら

は、取水堰が地域の生命を握ることを知っています。成功すればカシコート二五〇〇ヘクタールもまた、マルワリード流域と同様、多くの農民が戻って生活を維持できる。失敗すれば……逆にマルワリード側が再び沙漠に戻り、十数万人が路頭に迷うのは確実です。その分かれ目が、ここ数週間に迫っています。詳しくは、追って紹介し



地縁・血縁を超え、地域で重きを成す実力部隊。この仕事を支える大きな柱の一つ。

瀬戸際に立たされているということなので
す。

理屈も評論も虚ろ

時々流されるアフガン情勢は、戦局や危険情報、復興支援をめぐる報でなければ、それに対する評論ばかりです。いくら安全や人権が主張されても、一般のアフガン人

の生命や人権は含まれていないようです。

もう静かにしておいて頂きたい。そう思います。見捨てられた人々の声が届くことは、今後もないでしょう。あっても、情報洪水と議論の中で薄められ、伝わることはないと思います。ここでは、どんな理屈も評論も虚ろです。それよりも、餓えた人々に温かいパンの一切れを分かち合おうとする真心だけが、励みであり、信ずるに足ることです。

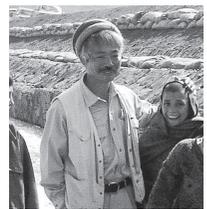
生殺与奪の権を握る自然の大河は、轟々と流れ、真つ白な水しぶきをあげて岩に砕け散る。それが何かを語るようです。人を欺かぬメッセージに耳を傾けます。

何もアフガンだけが困っている訳ではありません。しかし、平和とは生きた力です。どんな事情にあっても、私たちを根底から支えるのは、そんな人の温もりと和やかさであって、批評や「情報」ではありません。まして暴力や政略は論外です。

日本も寒々とした状態が続いていると聞きました。これまでの温かい支えと、変わらぬご理解に感謝申し上げます。

良いクリスマスと新年をお迎え下さい。

ジャララバードにて



中村 哲（なかもら たつ）九州大学
医学部卒。専門は
神経内科（現地では
内科・外科もこなす）
国内の病院勤務を経て、一

九八四年パキスタン・バクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。以来二八年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百ヶ所以上）事業を実施。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長二五・五キロが開通した。近年の大洪水と渇水により壊滅した既存の取水口の改修・新設にも取り組んでいる。年間診療数約四万五千人（二〇一一年度）。

◎現地スタッフからの便り

清掃係から調理まで

PMSダラエヌール診療所調理担当
グラムジャン

私はミラジャンの息子でグラムジャンと申します。

PMSには一九九五年一月四日から現在まで勤め、その間様々な職務を経験しました。まずペシャワール病院での清掃係から始まり、次にキッチンで調理助手として働きました。それからしばらくしてアフガニスタンのダラエヌール、ダラエピーチ、ダラエワマ、一九九八年にペシャワールにPMS基地病院ができてからは、パキスタンのコーヒスタンとチトラルの各診療所にも調理人として順々に派遣されました。

その後、ダラエピーチ診療所の調理人を二年間勤めたあと、ヌーリスタン州のワマ診療所で一年働きました。これらの診療所が戦乱のため二〇〇五年に政府に移譲されたからは、ペシャワールのスタッフハウスに続きダラエヌールで二年、門衛として勤

めました。

ダラエヌールの試験農場がガンベリ沙漠に移された後は再度診療所の調理人として働いています。

PMSはアフガニスタンが内紛や戦争で医療や医薬品、食糧・水の不足で困難に直面している時、他の援助組織などが全く活動していない中で私達を見捨てることなく、ドクターサーブ中村の監督の下、困窮する人達を助け続けてくれています。

ドクターサーブ中村とご家族、そして日本の支援者の皆様の幸せを心からお祈りいたします。

心から感謝申し上げます

PMS現場監督
グラムサキー（タラフダール）

一六〇〇本の井戸を掘る

私の名前はグラムサキーと申します。カールブル大学理学部化学科を卒業しました。



調理中のグラムジャン

政府の職員として空軍基地で三五年間勤め、その後、軍関係の学校で教鞭を取っていました。

深刻な早魃^{かんぼつ}が我々の国を脅かした時、日本の兄弟達がPMSの名の下にアフガニスタンにやって来ました。PMSはもともと医療活動を行っていて、アフガニスタンの無医村地域であるダラエヌール、ダラエピーチ、ダラエワマに開設した三つの診療所で困窮する住民の診療と健康維持にあたり、パキスタンの基地病院と診療所ではアフガン難民の診療にも当たっていました。



ガンベリ沙漠で作業中のタラフダール氏と中村医師

深刻な旱魃でわが国、ことに東部は壊滅状態に陥り、その結果多くの住民が故郷を捨てパキスタンに移住していました。そんな中でドクターサーブ中村と日本の支援者の方々の助けにより、二〇〇〇年に井戸の掘削事業が始まりました。それまでは人も動物も同じ水源の水を飲み水にしていました。

この水利事業により多くの人々が恩恵を受け、水を媒介とする病気にかからなくなりました。私はその頃PMSで働き始めて

から現在に至っています。当時PMSはソルフロッド郡、ロダット郡、アチン郡、ダラエヌール郡で作業をしていました。私は水を確保できた井戸にエプロンや手動ポンプの取り付けを担当し、合計一六〇〇本の井戸を完成させました。

空爆下の食糧配給

カーブルで実施した食料配布事業にも参加しましたが、この経験は決して忘れることができません。このPMSの事業によって栄養不良の子供達をはじめ多くの人々の命が救われたのです。激しい空爆が続く中、我々はカーブル市民の住居を一軒一軒廻り調査をして、合計一八八四トンの小麦と一六七キロリットルのギー（調理油）を配りました（編注・当時の様子は『空爆と「復興」に克明に記録されている』。日本の支援者の方々の願いどおり、我々はこの事業を成功裡に完了することが出来ました）。

この後、私は水路建設プロジェクトに配置され、ドクターサーブ中村の直接指揮の下、蛇籠のセクションで籠を編んだり、鉄筋のワイヤーを切って橋やサイフォン部の建設に当てる作業に従事しました。

続いてベスード護岸工事に配置されました。ベスード地区ではクナル河大洪水の際に一五四〇ヘクタールの土地が被害を受け、多くの家屋が倒壊していました

が、この護岸工事により同地区に居住する三三〇〇家族がその恩恵を受けました。

その次はガンベリ沙漠で開始することになった農業計画に任命されました。そこで私の任務は試験農場内の、水路や小さな橋の建設や様々な種類の樹木を植えることです。今日までに私は七万本あまりを植樹しました。

これらドクターサーブ中村の直接指揮の下に行われた事業は、不安定な治安情勢や冬の寒さ夏の暑さなど、厳しい状況にありながらも順調に進められました。

東部復興の英雄

アフガニスタンの厳しい治安情勢のなか、我々アフガン人を助けてくださったことに対し、皆を代表してドクターサーブ中村に感謝すると同時に、困難な時に我々を支援してくださった日本の支援者の皆さんに心から感謝申し上げます。我々貧しい者達にとって、ドクターサーブ中村はアフガン東部復興の英雄です。我々ナンガラハル州住民は誰もが皆、ドクターサーブが自らの人生を賭して行ってくださったその事業に心から敬意を抱いています。ドクターサーブは偉大な方です。ドクターサーブのご長寿をお祈りするとともに、先生と先生のご家族に神のご加護がありますように。

【カラー特集】用水路建設工事の変遷 第1回 マルワリード用水路



用水路A地区（ジャリババ洪水路部）。上は2003年12月、下は2009年4月



D地区D池付近。上は用水路をひく前の2003年4月、下は2010年2月。国道右側に石出水制が3基見える



スランブール平野。上は用水路をひく前の2003年6月、下は2012年8月



Q3池。上は池の造成工事中の2009年7月、右は水をひいて池が満水となった直後の2009年8月（写真左手はガンベリ沙漠）、下は2012年4月



患者から医療従事者へ

元PMS病院職員

フアザレワヒード

十三歳でミッシヨン病院に

私はフアザレワヒードと申します。三二歳です。美しい自然で知られるスワート溪谷に母と姉妹二人、兄弟三人と一緒に住んでいました。同地のカラム地方は緑に覆われた山と背の高い樹木、マイダン地方は鱒、ミンゴラ地方は清流で有名です。

一九九三年、突然赤い発疹が私の全身を覆いました。とても痛く、腫れて高熱が出ました。家族が色々な医者連れて行ってくれましたが、症状はなかなか回復しませんでした。

そうこうするうちに近所の人がペシャワールの皮膚専門医ラザモハメッドハーン医師の住所を教えてくださいましたので、ダブガリガーデンにあるハーン医師の診療所に行きました。私を診察したハーン先生は、「うちの診療所の向かいにミッシヨン病院がある。そこに行ってドクター中村を訪ねなさい。彼なら君の病気を治してくれるだろう。

う。それ以外の方法でこの病気を治すのはとても難しい」と言っていて、ミッシヨン病院に紹介状を書いてくれました。時刻は夕方五時になっていました。ミッシヨン病院の看護師に、明日の朝になればドクター中村に会えるから今夜は病院に泊まりなさいと言われ、兄と一緒にミッシヨン病院に泊まりました。

ハンセン病の患者をみて恐くなる

翌朝、ドクター中村が病棟に回診に見えました。回診後に私を診察した先生は「君の病気は治療可能だ。ただし、治療には時間がかかる。今すぐ入院して今日から治療を始めよう」と仰いました。でも、看護師に入院棟に案内され、手足の指や鼻が変形している患者たちを見てとても恐ろしくなりました。何も知らなかった子どもの私の目には、その患者たちがとても危険な人達に見えたのです。私が十三歳の時のことです。

私はドクター中村に「僕はまだ学生なので入院出来ません。学校を長期欠席する訳にはいかないのです、お願いですから自宅で服用できる薬を下さい。ちゃんと飲み続けますから」と懇願しましたが、ドクター中村は「治療薬の自宅服用は危険なのであげられない」と仰いました。私は泣いて、兄に僕は何かがあっても絶対にここには入院し

ないと言い張りました。兄はドクター中村と二人きりで話をした後に私のところに戻って来て、自分も病院に残ってお前のベッドと一緒に寝るから、と言いました。そこで初めて私は入院に同意しました。

その後ミッシヨン病院に二ヶ月入院しました。開始した治療はともうまく行っても、腫れも引き、熱や痛みも改善して行きました。入院中は遊んだり勉強したり、他の入院患者たちや兄とおしゃべりをして過ごし、そのうちに友達も沢山出来ました。友達というのは他の入院患者や昼夜私の看護をしてくれる病院スタッフや日本人スタッフの人たちのことです。私は英語、ウルドゥ語、パシウトウ語が話せるので、日本人スタッフと患者の通訳に役立ちました。退院後は自宅で投薬しながら療養し、炎症反応が出たらミッシヨン病院に戻って治療を受けました。だいたい三、四ヶ月毎にENL(らい)反応が起きてミッシヨン病院に戻り、一、二ヶ月入院するというパターンを繰り返しました。経口薬と点眼薬は好きではなかったのですが、シスター藤田にはいつも、決められた時間にちゃんと服用するよう忠告されました。それからは決められた時間に薬を飲むようになり、治療開始から七年で健康な体を取り戻すことが出来ました。この七年間、勉強を続けるのはとても大変なことでした。

ハンセン病治療の結果、私の皮膚の色は茶色に変わってしまったっていました(編注・治療薬の色素沈着による)。学校でも近所でも、昔は赤みがさした白い肌だったのにどうして突然そんな色に変わってしまったのだ、と皆に聞かれ、それに対してきちんと説明をするのはとても難しく、こんなことならいっそ勉強を諦めて家に閉じこもってしよう、と決心しました。肌の色が変わった理由をいちいち説明するのが嫌だったからです。ところが、私が学業を諦めたと聞いたドクター中村とシスター藤田は繰り返し何度も、是非勉強を続けるよう私を説得しました。それでも一度学校に通い始め、肌のことを聞かれても気にしないことにしました。そうして、時間はかかりましたが、やっと高校を卒業することができたのです。

PMSで働き大学にも合格

治療が終了したとき、ドクター中村に先生のところまで働いてハンセン病のことを勉強したいとお願いしました。この病気で障害を持つことになった患者を助けたいと思ったのです。ドクター中村は賛成してくださり、先生と一緒に働くことを許可してくれました。

そうしてPMSで働いてゼロから勉強を始めることになりました。ゼロからという

のは、当時の私にはこの病気の知識は全くなかったからです。午前中は実際に患者の治療に当たり、午後は勉強会を開いて解剖学・生理学・ハンセン病学・英語を学習しました。当時、一緒に学習した勉強会のメンバーは六人でした。

その後、公立大学(KIMS)の難しい試験に挑戦し、合格して准看護師の資格を得ることが出来ました。この資格は私の将来にとって大変有益なものです。この試験に受かったことはこれからの私の人生の大きな支えになりますし、そうするように私の人生に指針を与えてくれたのがシスター藤田です。

私はドクター中村と他の病院スタッフとともにチトラール北部やコーヒスタン、アフガニスタンで働きました。これらの診療所は大変危険な地域にありました。チトラールでは洪水にあり、スタッフも私も大変危ない思いをしました。我々医療スタッフは住民と一緒に翌朝マズジに到着するまで夜通し歩きました。ドクター中村はその行動を称賛し、表彰して下さいました。

私はこれまで十九年間、ドクター中村とともに過ごしてきました。はじめは患者として、次に生徒として、そして先生の下で働く職員として。その十九年の間に、ドクター中村の実に様々な側面を見てきました。

その場に馴染むドクター

先生はどこにいても容易に自分を合わせその場に馴染んでいかれます。出会った初めの頃は、ミッション病院やJAMS(日本アフガン医療サービス)の医者、外科医としての先生を知りました。次にPLS(ペシャワール・レプロシー・サービス)やPMSで医師や看護師にレクチャーをする教師としての姿を見ました。また患者を治療し助ける先生の姿に父親を見ました。

アフガニスタンのダラエヌールの現場で働く建設事業者としての姿も見ました。PMSやアフガニスタンでの水路工事でスタッフの話に耳を傾け最終決断を下す裁判官の姿も見ました。カラチから持ち込んだローダーや掘削機などの重機をはじめ様々な車両を操縦する運転士としての先生も見ました。また正確に土地を測量し、水路を建設する技師の姿も見ました。今では、この水路を水がたゆたうように流れています。ドクター中村は本当に沢山の資質を持っている方です。

シスター藤田もまた、看護師としてのスキルや業務表の作成、診療記録の取り方、職員間で不公平のない休日の割り振りの仕方、コンピューターの使い方、食費の経済的な使い方、看護師試験の受験勉強の方法などを私たちに教えてくれました。私はそ

うして今までに教えて頂いた技術や知識を他の人のために活用し、それがまた私自身の成功にも繋がっています。私はPMSでゼロから全てを学ばせてもらいました。

他のNGOにない誠実さと辛抱強さ

ある日、PMSの病棟の壁に日本の子供達を書いた一枚の絵がかかっているのに気が付きました。この絵は何ですかと聞くと、日本の子供達からその絵とプレゼントが贈られてきたのだという答えが返って来ました。障害をかかえるPMSの患者への贈り物と、毎朝親御さんたちからもらうお小遣いを貯めて、パキスタンの文字の読めない人たちへとお金を送ってくれたのだそうです。この答えは私の胸にずっと響きました。自分を犠牲にしてまで他者を助けようとする子供達とは一体……日本人は本当になんと素晴らしい人たちなのだろうと思いい、心から深く敬意の念を抱きました。

現在、パキスタンでは多くのNGOが活動しています。しかしドクター中村と先生の率いるグループが見せた誠実さ、辛抱強さ、行いの正しさを他のNGOに見たことはありません。先生達には、我々の活動の目的はお金ではなく、困った人たちをどのように支援するのが大切なのだということをお教わりました。どうやって患者が社会で普通に暮らせるようにするかが一番大

事なことなのだ、と。先生たちはパキスタンから去って行かれましたが、人生の目的とは何なのか、誠実であるということとは、善い行いというのはどういうことなのかを教えて頂きました。

先生達ここにいらっしやらないことはとても寂しいです。今、私の目は涙でいっぱいです。なぜなら、私は今この文章をただこうして手で書いていただけではなく、私の心で書いているからです。先生達を忘れることは出来ません。皆さんの健康と長寿を心から祈っています。

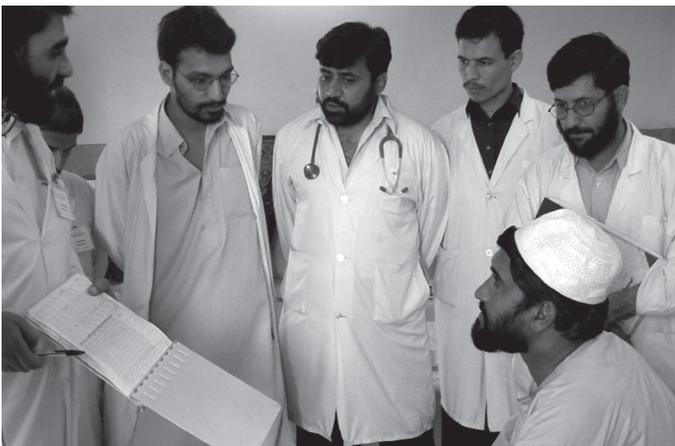
スワートからペシャワールへ

現在、私は大きな組織で働いています。ドクター中村たちに見た誠実さやよい行いに触れることはありません。時々、病院でヨーロッパから来た医者や看護師たちと同期することがあります。そんな時、私が見てきたドクター中村と先生のチームのパキスタンでの働きについて話します。ここはもとPMSという組織で、患者のために仕事をしています。職員を罰することがあったとしたら、それは患者のためのみをうしていた、そして先生達は患者の社会復帰を支援しようと力を尽くしてくださった、と。先生達はパキスタンから離れていってしまったけれど、私達に沢山のお手本となるものや、思い出を残して行ってく

ださった、と話しています。

二〇〇九年にタリバンが軍、警察、民間人や建造物を攻撃して以来、スワートの政情は一変し、一般市民にとって大変危険な状況になりました。そして多くの人が家族や家を失いました。その結果、スワートの住民は他の地域への移住を始めました。私と私の家族も家を失い、ペシャワールへの移住を決心しました。

スワートの家を失い、家族とペシャワールに移って来たので住む家を提供して欲しい



PMS 病院回診中 (後列右端がファザレワヒード)氏

い、とシスター藤田に頼みました。

シスター藤田は状況を理解してくださり、PMS病院の正門の向かいにある良い家を見つけてくれました。水もガスも電気も必要なものは全てある家でした。タリバンの攻撃が続いている間、私は家族とこの家で九ヶ月間過ごしました。その間、スワートに行つて以前住んでいた家の様子を見に行きましたが、完全に破壊され、スワートは私たちが住むにはあまりにも危険な場所になっていました。そこでペシャワールに賃貸の家を探すことにし、見つけることが出来ました。現在、妻と私と子供二人はペシャワールに留まり、残りの家族は家を建て直してスワートに住んでいます。

私は二〇〇六年に結婚し、息子一人と娘一人を授かりました。現在、家族四人でペシャワールに住んでいます。現在、ペシャワールは今も危険な状況が続いており、タリバンと名乗る者達が軍警察や政治家に攻撃を仕掛け、多くの民間人が爆撃の巻き添えをくって死んでいます。スワートと似たような状況です。

私は常に自分の家族そして家族以外の人々の長寿を祈っています。神様のご加護がありますように。アーメン。

誰の助けも借りず自分ひとりでこの文章を書いたので間違いが沢山あるかも知れないことをお詫び申し上げます。でも、私の

PMSに対する気持ちや言いたかったことを理解して頂ければ幸いです。PMSについて私が心に抱いている気持ちを誰にでも分かってもらえるよう、出来るだけ平易な言葉で書きました。我々はPMSの活動を真に必要なとしており、その再開を心から祈つ

ワーカー通信

カシコートが緑で 覆われる日を夢見て

PMS現地会計担当

村井光義

二〇〇九年八月、クナル河から引き込まれたマルワリード用水路の水はガンベリ沙漠を潤し始め、それを機に試験農場はダラエヌールからガンベリに移設された。今年十月、その頃に試験農場で植えられたザクロが初めて収穫され、早速ジュースにした。程よい甘みと酸味が多くの方の協力によって成った貴重なジュースは有難く、とても美味しかった。

現在、PMSはカシコート用水路の取水口建設に全力を注いでいる。この河からの引き込み口が無ければ、水路が整備されて

ています。有難うございました。
ドクター中村、シスター藤田、中山さん、村井さん、杉山さん、藤野さん、野田さん、その他の私を知っている日本人スタッフの皆様によくお伝えください。



村井ワーカーと働く会計担当ハニフラ氏(左)とカービル氏(右)

いても水は農地へは流れない。「カシコートに水を送る」その一心で皆はまともに、人々の生活を左右する大変重要な局面で、中村先生始め職員や作業員は着々と工事を進めている。

近隣から集まった作業員は、工事期間中は日当で暮らしを立て、灌漑が始まればその水を利用して農業に従事する。PMS職員は百十数名。その内これまでの灌漑工事によって直接水の恩恵を受ける土地に住む職員は二〇名程だが、それでも毎日精一杯働くのは労賃のためだけでなく、これらの工事がそこに住む人々のため、子どもたちの将来のために本当に必要なことであり、日本からの心のこもった支援に伝えたいとの思いからだろう。

PMSが工事を実施した用水路流域では、夏の増水期や冬の渇水期にかかわらず、安定して農産物を収穫できている。ダラエ

ヌール診療所では日々二〇〇名の患者を診察し、飲料水を得られなかった地域では井戸が役立ち、マドラサでは七〇〇名の生徒が学び、モスクは人々の拠り所になっている。現地の人々の立場に立ったPMSの活動は、多くの人たち（職員・地域社会・公的機関・日本の支援者など）と信頼関係を築き、目に見える成果に繋がっている。その成果によってさらに深くなった信頼は、その後の活動の大きな支えとなっている。

十年前に着工したマルワリード取水口がカシコト取水口建設現場の対岸に見える。今年植えた六千本のザクロも三年後にはたくさんの実をつけ、皆の喉を潤すだろう。

2013年カレンダー

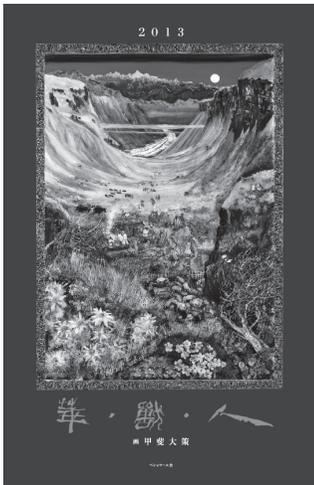
「華・獣・人」

画・甲斐大策

販売中です

A2判変型(画・7点)

定価: 1500円(税、送料込み)



今年も恒例のカレンダーを制作しました。同封のハガキでご注文いただけますので、お早めにご注文ください(ご友人・知人の方々へのプレゼントも承ります)。

サファル・バハエル! (良い旅)

マードルの形見

甲斐大策

12

六千米近いパンシエールの雪嶺が残陽に赤く映える。霧に沈んだチャリカル盆地平原部から、タベの祈りに誘う複数のアザーンが遠く近く湧き上る。

ミリヤが十歳になる息子と家の前の流れて手足を洗っている時、背後に自転車の軋む音が聞こえた。

「これ、マードル(母)の……」

昨夏、母が急逝。六十歳だった。ミリヤは、遺品のいくつかを既に貰っていたから今になって何を、と怪訝な表情で小さく軽い黒布の包みを受け取った。

泥屋に入り、息子が茶の用意をし、兄は石油ランプに火を入れる。

「ババ(長老)が、直接手渡せど。そうそう、街道でシャウハル(亭主)が、葡萄の荷、あと一台分積んだら帰るといつていた。」

カーブルの北、パグマン山塊の裾を北方へ刻んで古来の街道が伸び、その東側に充分な水と豊穡な耕地の盆地が拡がり、外縁部には、タジク小作農民の集落が点在する。

ミリヤはそこで生れ育ち嫁いだ。三人の幼い生命が、名附ける前に逝き、四人目の男児だけが育った。

人々の流出と彷徨の日々にも、農民達は盆地に留っていた。安全な異国から地主が折々の権力に、農園の保持と葡萄輸送の保証を謀り、農民達は辛うじて生き延びてきた。大半の働き手は、平和時からの飢えと病いに戦乱の不安と絶望を重ねてきた世代である。心の中の誇りと入れ換って居座った空洞を埋めようもない者達が手掛ける、荒れていく樹々や土もまた荒んでいた。

布包みの中は、赤・青・黄・緑他原色の絹糸と作りかけの胸当てそして紅色の糸が通った儘のスザン針刺繍)だった。グレ(糸目)は一センチ角に百以上、ミリヤには初めての緻密さである。鉛筆の薄い線が、実家伝来の幾何学紋様を示している。数ヶ月を要する筈の白生地を埋める小宇宙が、ミリヤの胸中にゆっくりに拡がり始めた。

「義の人」 中村哲医師

ペシャワール会のドキュメンタリーを制作して十四年

日本電波ニュース社・プロデューサー 谷津賢二

「ドン・キホーテは、黄金や領地よりも、彼の錆びた槍や骨と皮ばかりの馬を、いつそう誇りとした。そして武士は、このラ・マンチャの同志に対し、心から共感するのである。」（新渡戸稲造『武士道』より）

今から十四年前の一九九八年。パキスタンの辺境で、私は馬に揺られながら前を行く馬の上の中村医師の背中を見つめていました。お世辞にも立派とはいえない難い作業服をまとい、頭にはよれよれの現地帽。無精ひげをたくわえ、半眼のまま訥々と語る。

「中村医師はどんな人なのか……？」私はその人物像をつかみかねていました。しかし、標高四千メートル近い高地の村で、その一面をかいま見たのです。村人の診察を始めると中村医師の眼には力がみなぎり始めていました。医師の到来を聞きつけ、多くの人々が集まってきました。中村医師は休むことなく診察を続け、テントの中で重篤な患者への手術さえ行いました。野戦病院のような状況の中で最善の医療を尽くすそ

の姿。持たざる者への強い愛情と深い理解。その返礼として、村人が示す中村医師への信頼と親愛の情。それは文字通り「医は仁術」を地で行く男の姿でした。そして、言葉も文化も民族も違う辺境の地で、なぜ中村医師はこれほどの信頼を得ているのか……？と考えたことを今でも鮮明に覚えています。

その時から私は中村医師の虜（こいつ）となり、その人となりを知りたいと思いはじめたのです。以来、私の頭から「中村哲医師とは何者か……？」という問いが離れたことはありません。言い方を変えれば、十四年間も中村医師を取材し続けてきてもなお、この問いへの答えを見出せずにいたということです。

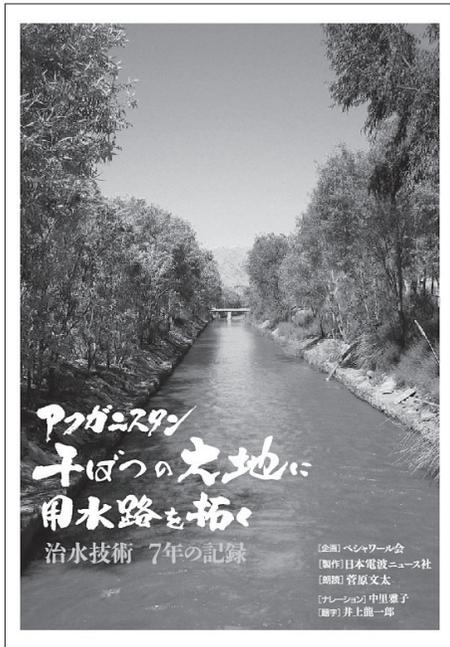
危険な局面で見せる胆力。声を荒げることにの無い穏やかさ。医師としての確かな技術と見識。会話の端々からうかがえる際立ったその知性。昆虫の話をするときの笑顔や、時として口にするつましいユーモア……。私は、こうした様々な中村医師の姿



現地活動の記録を始めて10数年になると、時には派遣ワーカーのように働く事に…
…（右が谷津さん）

に取材者として接してきました。そのどれもが中村医師の一面であることは間違いないと思います。しかし、中村医師の理念、本質を本当に理解しているのか不安になるのです。知れば知るほど、その巨大な人物像が、生半可な表現を拒むのです。そんな時に、私は中村医師のある文章を目にします。

「かつて忌避された死の荒野が豊かな草地を生み、遊牧の群が続々と集まってきま



『アフガニスタン 干ばつの大地に用水路を拓く 治水技術 7年の記録』(ペシャワール会企画/日本電波ニュース社製作)。谷津氏は本DVDの監督。

す。この光景の中に『平和』があります。人と和し、自然と和すことは、武力に勝る力です。……平和とは理念ではなく、ここでは生死の問題です」。

平和とは理念ではなく……生死の問題……。そして中村医師が見た「平和」の光景を私自身も目撃していたことを改めて思い出したのです。理念(頭)で中村医師の人物像を求めていたのが間違っていたのは……とその時、気付いたのです。その厳格な顔を見、その思索的ではありながらも確かな言説を聴く内に、何も格好をつけた理解をすることは無いのではないかと、私は「男、中村哲」と接しているのであり、その活動は「浪花節」なのだ……と、素直に思うようになったのです。

不確かで、怪しげな理念がはびこる世の中で利害を顧みず、正義と信義を重んじる人、つまり中村医師は義人である、と私は思うのです。その姿を理解するために言葉の違い、民族の違い、宗教の違いは意味を成さないのでしょうか。人々は中村医師の中に信義を見てとるからこそ、信頼をよせるのです。そして私は、常々ある「義人」と中村医師とを重ね合わせています。明治の時代、足尾鉍毒事件に生涯をささげた田中正造です。地位も名誉も捨て鉍毒被害に苦しむ栃木の貧農救済のために生きた正造は、こんな言葉を残しています。

「真の文明は、山を荒らさず川を荒らさず村を破らず人を殺さざるべし」。

私の勝手な妄想ですが、田中正造の思想は脈々と生き続け、時と場所を変え中村医師という人格に引き継がれているのです。利に聡い人物が跋扈する日本でペシャワール会と中村医師の活動が、貴重なものに見えるのは私だけではないでしょう。

私たちの映像がその一端でも記録できていればと願いつつ、ラ・

マンチャの男の行き着く先を記録し続けたと思います。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

▼郵送方法の変更について▼

*一部地域の方々は発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

*ご寄附をお送り下さった郵便払込用紙は、郵便局からコピーで届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円がかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。(使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい)

*一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

●事務局便り

*現在建設中のカシコートとマルワリードを結ぶ五〇〇メートルの掘は、そのスケールや立地をみても、これまでになく大工事であり難工事です。しかし中村医師の報告によると、工事は熟練した現地スタッフによってスピーディーに行われ、現地オフィスと現場の連携もスムーズとのこと。オフィスの責任者のジヤ

医師が頻繁に現場を訪れるとともに行政とも適宜接触「行政側は灌漑局を中心に積極的に協力、地域自治会は背後から各勢力に圧力をかけ」工事を守っています。「現地活動の成果が、一挙に集中し、底辺の人々の、無言の圧力が躍り出て、それが実のある力となって動いている」とのことです。「河に尋き、天に祈る」(中村医師)という言葉をお伝えします。

*十一月二十四日(土)に、現地の記録DVD「アフガニスタン 干ばつの大地に用水路を拓く 治水技術の七年」(企画・ペシャワール会/製作・日本電波ニュース社/朗読・菅原文太/七三分 税込・送料込二二五円)の上映会を福岡市内で行いました。今回は現地のスケールを少しでも実感して欲しいと、大きなスクリーンのある九〇〇人規模のホールを借りました。午前、午後と四回の上映を行い、八〇〇人の方に観て頂きました。驚いたのは、上映終了の段階で四回共に拍手が起こったことです。観客の半分以上が非会員の方だったこともあり、「ペシャワール会の活動が具体

的に判った」「とても感動した」と感想を頂きました。今後、全国各地で上映会を企画して頂きたいと希望しております。有料/無料、小規模/大規模に関わらず、難しい条件はありませんので、上映会を催して頂ければ幸いです。(DVDのご注文は事務局へ)
*今年も暮れようとしております。皆様の変わらぬご支援に感謝いたします。

◎村から

書き損じのはがきを手に事務局のドアを叩いてから三年になろうとしています。NHKの「知るを楽しむ」という番組で中村先生の思いを知り、講演会で人柄を知りました。思えば初めて立ったコピー機の前でコピー一枚取ることが出来ず、途方に暮れたことを懐かしく思い出します。現在でも学んでいくことに就いては闘いの連続ですが、同じ志を持った友人たちに支えられ頑張っています。私の仕事が用水路の護岸の石の一つか、もしくは柳の枝くらいはお役に立っているのかと思いつつ……。命がけて世界の矛盾と闘い続けている先生と今日もせっせと事務局に通い続けている心優しいき同士たち、そして多くの支援者の皆様に乾杯!

不確かな明日の命のいとおしきかの地に届け我等が
エール
・アフガンの沙漠の畦の野の花は色鮮やかに彼の人に
写れり
(KH)

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲 用水路建設事業の7年をつづった感動の記録 【3刷】1890円

逆境で診る 逆境から見る 【3刷】1890円

医者 井戸を掘る 【10刷】1890円

医は国境を越えて 【6刷】2100円

ダラエヌールへの道 【重版・5刷】2100円

ペシャワールにて 【8刷】1890円

アフガン 高橋修・編著
農業支援奮闘記

農業計画6年余の失敗と成功を記した貴重な記録【新刊】2500円

聖愚者 甲斐大策
の物語 1890円



石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
電話092(714)4838

人は愛するに足り、
真心は信ずるに足る

アフガンとの約束
中村哲/澤地久枝(聞き手) 1995円

岩波書店 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電話03(5210)4000
価格はすべて税込価格(税5%)です

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局をFARAHOUSE(〒八一〇〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇―二五 上村第二ビル六〇三号Ⅱ)〇九二―七三二―(三三七二)内におく。